様式2

令和2年度自己評価表（最終評価）

鳥取県立倉吉西高等学校

中長期目標 （学校ビジョン）	（1）道徳教育の充実 ・高校生として望ましい規範意識、生活習慣を確立する。 ・自己肯定感を高めるとともに、他者に対する思いやりなど、周囲と豊かな人間関係を構築することのできる豊かな心を育む。 （2）キャリア教育の充実 ・社会的問題に関心を持ち、社会の一員であることを自覚させる。 ・探究活動をとおして、社会的問題の解決に向けて必要となる能力を育成する。 ・将来の生き方を前提とした進路指導を展開する。 （3）高い志を有し、学ぶ意欲を向上 ・将来の生き方を考えさせることで主体的に学ぶ姿勢を涵養するとともに、社会問題の解決に向けて必要となる確かな学力を育成する。 ・授業をとおして論理的思考力、表現力、コミュニケーション能力を高める。	今年度の 重点目標	（1）将来を見越した生活習慣の確立 （2）キャリア教育の充実 （3）主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上 （4）情報収集、情報発信の充実

年度当初					評価結果（年度末反省）		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
将来を見越した生活習慣の確立	①社会や人とのつながりを意識した生活習慣と表現力を身につける	【生活支援】 ・校舎内では自分から挨拶できるが、校外での挨拶は自分からできる生徒が少ない。好感の持てる挨拶については依然ハードルが高い。 ・ルールを守った生活を心掛けている生徒が多い中、スマホのルールを守れない生徒がいる。 ・TPOを意識したり、自分の置かれている立場を考えて行動できない場面がある。 ・正しい服装を意識している者が多い中、特定の生徒の意識が低い。 ・メモを取るなどしてスケジュール管理のできる生徒が少ない。	・相手の目を見て口角を上げ好感の持てる挨拶や返事が積極的にできる。 ・TPOを意識して、相手軸に立った行動をとることができる。 ・本校の一員として、ルールを守った生活や自分の役割を果たすことができる。 ・人格の向上を目指して、失敗をチャンスに変える思考ができる。 ・スケジュール管理ができ、見通しを持った余裕ある行動ができる。 ・通院以外の遅刻者のべ人数を年間150名以内とする。 ☆日常的な生徒観察により評価する。 ☆年間予鈴後登校者数・遅刻者数を目安に評価する。	・積極的で意欲的な行動や素直な態度に気付いたら声をかけ、褒めて育てる。 ・よりレベルの高い挨拶をすることの意味や大切さを、ステージやホーム、授業などで繰り返し伝えていく。 ・失敗をした生徒に対し、様々な立場から丁寧に励ます。 ・次なるステップが自分で明確にできるよう、手帳などにメモや記録することを指導する。 ・生徒手帳の復活を検討する。 ・月ごとの遅刻者数を見える化し、生徒に自覚を促す。	・生徒会執行部が中心となり朝の挨拶運動を実施し、相手の目を見て挨拶をしようと呼びかけたことにより、挨拶の質が向上してきている。校内での挨拶はできているが、校外で自分から挨拶できる生徒は3分の2くらいである。 ・服装については、服装検査を定期的に実施したことによって概ね良好だが、スカート丈や化粧に対しては、数名が検査時以外は守れていない。 ・空き缶の処理ができていなかったので、生徒会で話し合い自動販売機禁止期間を設けることとなった。 ・スマホのルール違反は、合計21名指導した。その使い方も含めて、今後も指導していく必要がある。 ・通院以外の遅刻は、合計90名。遅刻者数の目標は達成できたが、余裕を持った行動という意味では、予鈴着席ができない生徒が固定化し、のべ人数を増やす結果となった。朝の5分を大事にするところからスケジュール管理する習慣をつけさせたい。 ・特にS3の生徒が、今未来手帳を利用している姿が多く見られた。生徒手帳について検討したが、メモ欄が少ないことから、今後も今未来手帳を活用していく。	A	・朝の挨拶運動のように、ルールやマナー、礼儀の大切さについて、教員だけではなく生徒側からも日常的に伝え、実践できるようなリーダーを育てていく。 ・ルールを守れない生徒には、落ち着いた状況の中で事情を正確に確認していき、保護者の協力も得ながら指導に差が出ないようにしていく。 ・遅刻や予鈴着席の月別集計結果を参考にして、時間に余裕をもった生活をすることの大切さを、さらにSHR時や個人に向けて様々な立場から話をしていく。引き続き、全職員で立ち番指導を実施する。 ・メモをする習慣やスケジュール管理、時間に余裕を持った行動は高校の間に身に付けておくべき重要な習慣なので、今未来手帳に校則や年間行事を貼付し、意識の高揚と社会性を養う。
		【S1】 ・関わりのある教員には挨拶するが、関わりのない教員には挨拶をしない生徒が少なくない。 ・授業や集会の内容を、自らの成長や将来の姿とつなげて考えることができる生徒が少ない。 ・場にふさわしい行動がとれない場面がある。	・来客も含めて、校内で対面するすべての大人に礼儀正しい挨拶ができる。 ・教員や講師によって発信された情報を的確に受容し、自分の将来像をイメージしながら成長の糧とすることができる。また、発信者に対して質問や意見を述べるなど、適切な反応を示すことができる。 ・倉吉西高校の一員であるという自覚を持ち、校内はもちろん、地域の中においてもTPOを意識した行動をとることができる。 ☆生活の軌跡、日常の生徒観察により評価する。	・挨拶することの意味をステージやホームで継続的に伝えていく。 ・学ぶことの目的や意義、社会で生きていくために必要なことを適宜伝えていく。また、発表しやすい雰囲気作りや発表の機会を多く設定する。 ・集団を意識させ、個の行動が集団に影響を及ぼすことを自覚させる。間違った行動をとった場合は、時を逃さず正していく。	・自発的な挨拶ができる生徒が増えており、公の場でのマナーや態度も概ね良好である。 ・授業や講演会で学んだことを、自分の将来に生かそうとする生徒が増えているが、受け身であったり、その場しのぎとなる生徒も少数見受けられる。 ・予鈴着席、5分前行動が定着しつつあるが、予め教科書を開いておくなど余裕を持って次の準備をしている生徒の割合は高いとは言えない。また、全体的に落ち着いた行動がとれているが、他者への配慮に欠ける場面がまだ一部ある。	B	・日常的にマナー指導を継続し、「挨拶ができる」という段階から「どのように挨拶をするか」という段階へシフトさせる。 ・物事の意義や目的をその都度丁寧に伝え、生徒自身の未来とつなげて考えさせる。 ・日々のスケジュール管理を徹底して指導する。また、クラスや学校、地域社会の一員であることを自覚させ、自らの行動により周囲に貢献できることを体感させる。
		【S2】 ・挨拶ができる、時間を守る、学習環境を整えるといった行動は身に付きつつあるが、自らの生活を正すカを身に付けている生徒は少ない。 ・自分本位ではなく、相手や場を意識した言動ができる。	・自分で生活をコントロールする力を身に付けている。 ・自分の気持ちや感情を、TPOに応じて適切に表現することができる。 ☆生活の軌跡、日常の生徒観察により評価する	・ステージ集会やホームルーム、面談等で話をするとともに、日常生活の中での指導を継続していく。 ・生活の軌跡を利用し、生徒の生活について把握、指導を行うとともに、自己管理する力を高めていく。	・朝の予鈴着席の習慣が身についていない生徒はいるが、1年を通してステージ集会、講演会等に遅刻する生徒はおらず、時間通りに始めることができた。 ・指導を通じて、授業規律や時間を意識した行動は向上してきているが、身だしなみ等、状況や立場を意識した行動がとれない生徒が一部に見受けられる。	B	・今後とも朝の立ち番、遅刻連絡表を使っての指導を継続する。 ・状況や立場を意識した行動は社会の一員として必要な資質であることから、保護者に協力していただきながら指導を行う。
		【S3】 ・挨拶や時間を意識した行動は身に付きつつあるが、分離礼や置かれている状況、立場を意識した行動をとれる生徒は少ない。 ・4点固定など生活のリズムが確立している生徒は少ないが、手帳等を活用し、意識し始めた生徒が増えつつある。	・他者の存在を軸とし、自らの置かれている状況、立場を意識した行動や発言をすることができる。 ・生活のリズムを確立し、体調管理、スケジュール管理を自ら行うことができる。 ☆生活の軌跡、日常の生徒観察により評価する	・ステージ集会やホームルーム、面談等で話をするとともに、日常生活の中での指導を継続していく。 ・生活の軌跡を利用し、生徒の生活について把握、指導を行うとともに、手帳の利用を推進し、自己管理する力を高めていく。	・遅刻者数の減少、5分前着席できる生徒の増加など、時間を意識した行動をとる生徒が増加してきた。 ・模試や考査の欠席は、激減してきたが、日常の欠席者数が他ステージと比較して多い傾向にあった。 ・生活の軌跡を活用した面談や声かけ、手帳を活用することで生活リズムの確立、自己のスケジュール管理などを行うことができる生徒が増加してきた。 ・他者との関わりの中で、自己中心的な発言や行動が見られた時期もあったが、面談や生活指導、進路指導を通して、他者の存在を意識して行動できるなど変容が見られた。 ・進路指導を通して、報告・連絡・相談を事前にできる生徒が増えてきた。	A	・自己管理（体調・スケジュール）や生活リズムの確立については、入学時からの習慣づけが大切であり、日々の生活やホームルーム、ステージ集会など機を捉えた継続的な声かけや指導が必要である。 ・今後も分掌と連携を取りながら生徒の様子を共有し、声かけや指導に繋げていく必要がある。
	②講演会・生徒会活動等を通して学んだことを校内の活動に応用する	【生活支援】 ・時間通りに集合したり、静かに話を聴く習慣はできているが、聞いた話や生徒会活動で体験したことを、その後の自分の生活に活かし行動化できる生徒は少ない。	・前で話している人を見て、メモを取りながら話を聴くことができるとともに、積極的に自ら質問や発言をすることができる。 ・リーダーやリーダーを支える立場など、自分の役割を自覚し積極的に行動できる。	・授業も含め日常的に自分の考えを表出できるように、生徒が発言する機会を数多く設定する。 ・講演や行事に対して、自分の行動を振り返り、自分の課題と対策を記録するよう指導する。	・西高祭をはじめとして生徒会行事では、生徒主体の企画・運営が定着し、行事後にクラス内や集会などで集団の一員として率先して動く姿が見られる生徒が増えた。 ・新型コロナウィルスの関係で多くの生徒会行事が縮小・中止となったが、制約のある中で積極的に工夫するという姿勢が定着している。その一方で、S1の生徒会活動への関心が低く、執行部への希望者が少なかった。 ・講演会では、メモを取りながら話を聞くという姿勢がしっかり身についた。講演会や集会で司会や挨拶、質問をすることにより、人としての成長が見られる生徒もいるが、傍観者的で指示待ちの者もいるので、生徒同士でそういう者を取り込む声掛けが必要である。 ・部活加入者がS1は89%、S2は74%で、退部者がS1は8名、S2は11名。「継続は力なり」で競技力・技術力だけではなく人間力の向上にも繋がることを伝えていきたい。	B	・利用状況を把握し、ケータイ・スマホの持ち込みルールや自動販売機の使用など、生徒が自分たちで確認する機会を設ける。 ・行事などで身に付けた力や反省点を日常生活で生かせるよう、行事終了時の節目には、生徒会の掲示板への記入や生徒会ニュースなどを発行し考えを表出する機会とする。 ・一つ一つの取組や行事の意味や目標を確認しながら生徒会活動を進めていく。 ・部活加入者を増やし、退部者を減らすために部活見学の時期ややり方を工夫していく。
キャリア教育の充実	①チャレンジグループ活動を通して、興味関心から進路決定までのプロセスを確立する	【キャリア支援】 ・説明会や講演会、探究活動の内容を、ノートに記録している。 ・フィールドワークやチャレンジグループ活動が、進路について考える機会となっている。 ・進路志望をもとに各グループに所属し探究活動を行い、進路意識が高まった結果、自己実現につながっている生徒もいる。一方で、進路と探究活動が一致しない、進路志望が定まらず探究活動の深化が見られない生徒もいる。	・チャレンジノートに記録する習慣が身についており、考えや感想をまとめることができる。 ・大学・学部、職業に関する理解を深め、テーマ設定や研究活動が自らの進路につながっている。 ・フィールドワークなどの研究成果をまとめ、情報機器を活用して校内の発表に限らず校外でプレゼンテーションを行っている。 ☆S3のチャレンジグループ活動のアンケートにおいて、「積極的に取り組めたか」、「講義や施設見学により仕事や施設の役割などの理解を深めることができたか」、「さらに学びたい、知りたいなどの知的好奇心が深まった」、「進路目標が決まったり、目標に対する情熱が高まったなど、影響を与えた」の各質問項目いずれにおいても、6割以上の生徒が「とても思う」「やや思う」と回答している。	・手帳等を活用し、普段からメモをとる習慣を身につけさせる。 ・担任やグループ担当教員による個人面談をより充実させ、テーマや進路についてさまざまな角度から指導する。 ・進路とチャレンジグループ活動について、卒業生に体験談を語ってもらい、進路意識を向上させる。	・S1・2では、担任がチャレンジノートを点検し、生徒の様子を把握するようにしている。ノートを活用し、記録する習慣がついてきており、内容や感想も相手を意識した表現になってきている。 ・S2チャレンジグループ活動では、テーマ設定に悩んでいた生徒も解消に向かい、全員が中間報告を行う予定である。 ・卒業生が在校生に直接講話することはできなかったが、体験談やメッセージを動画で伝えることができた。鳥取大学オープンキャンパスや、外部講師を招聘し行った小論文・志望理由書の書き方指導講演会等は、生徒にとってよい刺激となった。 ・S3のチャレンジグループ活動のアンケートにおいて、「講義や見学などの活動内容」を除く全ての項目において、「とても思う」「やや思う」と答えた生徒が95%を超える結果となった。特に「進路目標、進路目標に対する情熱高揚」については、昨年度と比較しても高い結果となっており、生徒にとって充実した活動であったことがうかがえる。項目中、唯一95%に到達しなかった「講義や見学などの活動内容」（93．3%）は、新型コロナウィルスによる影響と発表時期が早まりスケジュールが変更になったことが考えられる。	A	・S2のテーマ設定については、今後もフィールドワークやグループ面談を通して指導していく。 ・チャレンジグループ活動と進路決定をつなぐ小論文指導については、3年間の指導計画を作成する。 ・「講義や見学などの活動内容」については、内容の見直し・検討が必要である。 ・チャレンジグループ活動については、次年度の日程も確認し、計画的に指導していく。
		【S1】 ・チャレンジグループ活動に対する意欲はあるが、積極的に取り組もうとする生徒はまだ少ない。	・チャレンジグループ活動が、現在の自分と未来の自分とをつなげるための取組となっている。さらに、進路開拓のための情報収集など、目標達成のために必要な具体的取組を主体的に行っている。 ☆チャレンジノート等による観察で評価する。	・チャレンジノートを有効活用し、様々な体験を積み上げていく。 ・記録の質が上がるよう指導していく。	・チャレンジグループ活動を通して、主体的に進路開拓しようとする姿が見られるようになってきている。 ・チャレンジノートへの記録が習慣化できるようになったが、記録の質の向上とノートの適切な活用が今後の課題である。	B	・チャレンジグループ活動をはじめとして、HRなどで日常的に進路刺激を与え、自己実現への具体的行動をさらに促していく。 ・チャレンジノートの確認を継続し、個別に指導を加えながら進路実現への支援を行う。
		【S2】 ・S1次に決定した研究テーマをもとに、情報の収集、分析方法について検討し、計画的に探究活動を進めようとしている生徒は多くない。	・探究活動をとおして、研究テーマに係る問題意識を育み、その解決に向けて情報収集、整理・分析し、多角的に方策を考えている。 ☆チャレンジノート等による観察で評価する	S3の発表、講演会、施設・企業等の訪問の機会をとらえ、社会に対する視野を広げ、個別面談により、進路に関連したテーマ設定、進捗状況確認や個別指導を適宜行う。	・フィールドワークなどの外部との関わりにより視野を広げられた生徒も多い。 ・個人面談を繰り返したことで探究活動を深めた生徒が多いが、自分の進路と探究のテーマとの関連が乏しい生徒もいる。 ・講演会を通して将来の生き方や進路選択について深く考える生徒が増えた。 ・中間報告（3月11日実施）を設定し、それに向けて多くの生徒が計画的に進めている。	B	・進路目標（学びたいこと）を明確にするために、S1、S2でのチャレンジグループ活動や進路学習を計画していく。 ・自らの進路に関連したテーマ設定になっているかを、個人面談を適宜行い、職員間で連携して指導していく。
		【S3】 ・自らの探究のテーマに沿ってフィールドワークを行い、発表に向けて準備を進めている。 ・フィールドワークイン関西など、外部との関わりにより視野を広げ、進路との関連も意識し始めた生徒が増えてきている。 ・探究が深まってきている生徒が増えてきているが、一方で自らの進路と探究のテーマとの関連が乏しい生徒も見られる。	・チャレンジグループ活動での探究、発表を通して自らの進路や学びに対しての意識が高まっている。 ・社会に対して課題意識を持ち、将来、社会に貢献しようとする態度が身についている。 ☆チャレンジノート及び発表により評価する	・個人面談を実施し、活動の進捗状況を把握するとともに、進路と探究内容が関連するよう指導・助言を与える。 ・新聞活用（掲示）等、社会に対して目を向ける機会を設定する。	・チャレンジグループ活動では、それぞれのテーマについて探究を深め、プレゼンテーションやレポート作成を行い、情報収集力や表現力を身につけることができた。 ・コロナ禍での活動を通して、調査研究の方法を工夫するなど、発想力や柔軟な対応力を身につけることができた。 ・96%以上の生徒がチャレンジグループ活動が進路意識の向上や進路実現に良い影響を及ぼしたと回答しており、活動が生徒にとって効果的なものとなった。一方で、将来の学びと関連しない研究となった生徒もいる。 ・自らの探究や他者の発表を聞くことで、社会に対して視野を広げ、課題意識を持ち、将来は地域貢献したいと考える生徒が増えてきた。	A	・ステージ1，2から進路指導を計画的に実施し、進路目標を明確にすることが必要である。 ・協働の姿勢を身につけるために、個人探究にこだわらず、グループでの探究を取り入れることも検討していく必要がある。 ・S1からの進路学習を計画的に実施し、個人面談等を通して自らの将来について深く考えさせ、将来の学びに繋がる研究となるよう指導していく必要がある。
	②フィールドワーク鳥取等の情報収集を通して、ふるさとの素晴らしさを学び、郷土への愛着を高める	【S1】 ・鳥取の産業・民俗・伝統や文化などについての関心度は低く、ふるさとの良さを他者へアピールできる生徒は多くない。	・ふるさとの素晴らしさを理解しており、ふるさとに誇りを持ち、地元に社会貢献したいという姿勢が見られる。 ☆チャレンジノート等による観察で評価する。 ☆アンケート調査の結果で評価する。	・適切な情報提供をしながら、計画的に事前学習に取り組ませる。フィールドワーク終了後には振り返りをさせ、ステージ全体で報告会を実施することによって、鳥取の魅力等について各グループからの情報を共有させる。 ・ボランティア活動への参加を促し、報告書を提出させるとともにステージ全体で報告会を実施する。	・フィールドワークイン鳥取のアンケート結果では、鳥取県に貢献することに対して否定的な回答をする生徒が一部にあったが、多くの生徒が地域への貢献を肯定的にとらえている。また、この取組を通して、ほとんどの生徒が鳥取県の企業に興味関心を持ち、進路意識を高めることができた。さらに、7名の生徒代表が中部地区高校生フォーラムに参加し、倉吉西高生として模範的な意見発表を行った。 ・ボランティアの募集が少なかったが、多くの生徒がボランティアに参加し、報告会では自らの学んだことを共有することができた。また、地域貢献への意欲をさらに高めることができた。	B	・チャレンジグループ活動等を通じて、将来、自分が地域や社会にどのように関わっていくのかをイメージさせ、社会人として必要な基礎力を身につけさせていく。また、今後の個人研究に向けて、地域社会の課題を発見・解決しようとする姿勢を養うとともに、地元の良さを再認識させる。 ・ボランティアに参加しようとする意欲をさらに高め、地域貢献しようとする姿勢を育む。

A：9割達成、B：8割達成、C：6割達成、D：4割達成、E：4割未満

評価項目	評価の具体項目	現　状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上	①授業改善や理解度の振り返り等の集約にICT機器を活用する	【学習企画】 ・対話をとおして自身の考えを見出し表現することのできる生徒が徐々にではあるが増えてきている。他に依存してしまい自分の考えが述べられない生徒もいる。 ・与えられた課題を自分の力で解く生徒もステージが上がるにつれて増え、さらに、与えられたもの以外に自発的な課題に取り組む生徒も出てきているが、まだ一部である。 ・プロジェクター等従来の機器については、ほぼすべての教員が活用している。タブレットに馴染みのなかった教員も使い慣れた先生に使い方を尋ねたりしているところ。 ・生徒授業アンケートの目標値に関して、全体では、項目3を除き、「はい」の回答が昨年度より微増。経年変化を見ても、徐々に「はい」の答えが増えている。項目1，2に関しては「はい」が80%を超えた。ステージ別でみると、現S2が昨年度S1に対して、「はい」の回答が全体的に減っている。	・生徒自身が考え、表現する機会をさらに増やすなど生徒の自発性、積極性を引き出す授業を行い、生徒のアウトプットの機会を増やす。 ・授業に主体的に参加するために、実のある主体的な家庭学習を行う時間が確保できている。 ・客観的な思考及び判断ができる。 ☆生徒授業アンケート：1～5の各項目について、前年比10%アップまたは80%以上。 1　思考・判断・表現を求める授業過程 2　アクティブラーニングの視点 3　発問の工夫 4　自然・社会等身の回りの事象とのつながり 5　関心・意欲の喚起	・校内研究授業を実施し、授業後には教員全員参加の研究協議を行って工夫した点や成果についての情報共有を行い、得たものを授業で活用し、生徒に還元していく。 ・考査の問題も「思考」「判断」「表現（論述）」を意識した出題に努める。 ・授業づくりのヒントとなるように、ICTを使った授業振り返りの方法等のデータを蓄積していく。 ・生活の軌跡を利用して面談を実施する。 ・具体的な生活時間を提示する。	・新型コロナウイルス感染症の影響もあり、全教員が参加しての研究授業は実施できなかったため、担当教科ごとでの実施となった。 ・考査問題においては、新学習指導要領を意識し、理数系の科目を中心に思考力を問う問題を意識した作問が見られる。 ・ICT活用については、G Suiteの環境を整え、一部実施を始めた。教職員研修を4回実施し、授業の録画や配信方法のみならず、配信授業における授業手順を学ぶなど、配信授業に対する環境整備を行った。普段の授業については一部の教員が活用している状況だが、臨時休業に向けて対策は進んでいる。 ・ICTを活用しての学習の振り返りについては、一部の教員による実施に留まった。紙を用いて振り返りを行った教員もいた。 ・生活の軌跡の活用、面談を随時行い、学習状況、生活状況の改善がなされている。 ・学校評価アンケートにおいては、 S1：9月実施アンケートより、いずれの項目も「はい」の回答が増え、3項目で80%を超えた。 S2：80%を超えた項目はなかったが、79．5%の項目が3項目あり、上昇傾向にある。 S3：生徒から「授業の充実」については90%前後、「授業の工夫」については80%前後の肯定的な回答で安定している。	B	・校内研究授業を今後も継続し、協議内容を今後の授業改善につなげていく。今後はICT活用を取り入れた校内研究授業を実施する予定である。 ・思考力・表現力を問う出題について、今後も学習企画委員会で検討していく。 ・G Suiteの活用例のデータ収集を続け、共有できるよう使用方法や実践方法についての研修の機会を設けるとともに、配信できる教員を増やす。 ・ICTによる学習の振り返りを展開し、自分の学力等を客観的に把握させながら、学力の向上を目指す。 ・生活の軌跡を活用した面談を続け、学習状況、生活状況の改善に向けた、指導を継続する。
	②学習アプリの活用を図り、家庭学習を充実させる	【学習企画】 ・年度初めに導入し、使用についてはこれからの状態である。 ・家庭学習時間の目標値に関して、学習習慣の定着は生徒による個人差が大きい。 S1：家庭学習時間2時間以上は8，9，11月を除いて未達成(通年平均55%) S2：同上2時間半以上達成は6，8，9，11月のみ(通年平均48%) S3：同上5時間以上32%（ただし、6月以降） いずれも目標は達成していない。	・長期休業中の課題の提示、進捗状況のチェックなどに活用できている。 ・急な連絡などに活用できている。 ・臨時休業などに対応するための動画配信などの研修を行い、教員が手法についての基礎知識を有している。 ・学習アプリの使用方法を全職員が会得しており、有効に活用できている。 ・生徒、教員の情報モラルが形成されている。 ・家庭学習時間の目標値 S1：2時間以上の生徒が継続して70%以上。 S2：2時間半以上の生徒が継続して70%以上。 S3：6月以降5時間以上の生徒が50%以上 。 ☆生活の軌跡の記録で評価する。	・必要に応じて、研修会を実施する。 ・生徒個々のネットワーク環境を把握し、必要に応じて、フォローできる体制をつくる。 ・学習アプリの使用例や、各教員の工夫について、情報が共有できるように研修などを随時行う。 ・S1・2については、ステージと協力し、家庭学習時間目標値の達成者を6割から始めるとともに、1時間未満の生徒をなくすよう面談等の充実を図る。	・S2では、英語学習アプリを定期的に利用できている。 ・S1・S2については、5教科型のスタディサプリの導入時期の影響もあり、夏季休業中以降での十分な活用までには至っていない。教科間の調整も含め、ステージ内で協議が必要な状況にある。 ・学習時間について、S1は統計期間の平均では79%と目標を達成している。S2は統計期間平均では43%。テスト前のみ目標を達成している（前年同様）。S3は期間平均で49%とほぼ目標を達成した。 ・家庭学習時間1時間未満の生徒数はテスト期間でない時期に増加する傾向がある。 ・英語スピーキング対策を定期的に行い、S1,2については各学期ごとにスピーキングテストを実施した。 ・S2は英語学習サプリを用い、スピーキング能力の向上に務めた。	B	・スタディサプリについては、日常の課題との関連を明確にし、活用方法を検討・共通認識を図るようにする。また、時期に応じた活用計画を作成する必要がある。 ・各ステージとも学習時間は増加傾向にある。今後は、学習時間のみならず、学習の質を確認しながら、学力向上を図る。 ・学習時間調査をもとに、学習時間の少ない生徒に対する指導を今後も継続する。
		【S1】 ・スマホ等による動画閲覧には精通しているものの、学力向上のために学習アプリを積極的に利用している生徒は少ない。	・授業の予習や復習、課題への取組が日常化されており、さらに自らの弱点科目を克服したり、興味関心のある分野を探究したりするために、意欲的に学習アプリを活用し、適切な家庭学習時間を維持している。 ☆生活の軌跡の記録、考査や模試の成績で評価する。	・生活の軌跡や面談等により、学習時間・学習方法、学習内容を確認し、必要であれば改善を促す。 ・ステージ会等で生徒情報を共有し、適切な指導を加える。	・「スタディサプリ」を活用する生徒は少しずつ増えているが、全体的に意識は高いとは言えない。その一方で、「クラスルーム」を利用した教科からの配信については、多くの生徒が活用しており、学力向上に一定の役割を果たしていると思われる。 ・年間平均で家庭学習時間2時間以上の生徒が94%と良好であり学習習慣は概ね定着しているが、弱点補強や自分の進路に応じた学習など主体的な学習には至っていない。	B	・弱点教科のある生徒については、従来の予習・復習とのバランスを考慮しながら、学習アプリを利用した学力向上対策を講じさせる。 ・生活の軌跡を分析し、学習時間の少ない生徒については個人面談等を通じて原因を究明し、進路意識を高めさせる。
		【S2】 ・多くの生徒の学習習慣は定着しつつあり、与えられた課題に対しては取組むことができているが、学習アプリの利用頻度が低い生徒がいる。自ら計画を立て、工夫して学習に取組む生徒は少ない。	・進路目標を明確に持ち、家庭学習で計画的に学習アプリを活用していることが習慣化されている。 ☆生活の軌跡、学習アプリ活用状況により評価する 。	・定期的に活用時間を確認する。 ・面談、保護者懇談等の機会をとらえ、現状分析と目標設定を行い、自らの課題に対して前向きに取組めるように個別指導を行う。	・週末課題など与えられた課題については多くの生徒が期限内に提出することができている。 ・英語学習アプリを英語科は年度当初から週末課題にするなど計画的に利用しており、生徒のアプリの活用は習慣化されている。しかし、他教科においては自ら計画を立てて利用している生徒は少ない。 ・模試結果の返却時、考査前後なども利用して個別に指導したが、家庭学習時間が増えない生徒がいる。	C	・スタディサプリの到達度テスト結果を利用して、苦手分野の課題配信機能を使うなど各教科で工夫が必要である。 ・家庭学習を充実させるために各教科で適切な課題の量、質を検討する必要がある。
		【S3】 ・進路に対しての意識は高まりつつあり、年度末には家庭学習時間増加の傾向が見られたが、1時間/1日平均に満たない生徒も数人見られる。 ・学習アプリを3月末に導入し、積極的に利用している生徒も見られるが、継続した取組になっていない生徒が多い。	・進路目標に向けて、各自がスケジュール管理を行い、隙間時間の学習や家庭学習を充実させている。 ・定期考査や模試を活用し、PDCAサイクルを実践し、学力を向上させる。 ・自らの課題を明らかにし、学習アプリを効果的に活用している。 ☆生活の軌跡、活動振り返りシート、学習アプリ活用状況により評価する	・定期考査や模試の結果をもとに、各自が自分の状況を分析し、学習に繋がるように面談指導を行う。 ・学習アプリの活用状況を把握し、適切な利用方法について面談指導により助言していく。	・面談等を通して進路目標が明確になり、目標に向かって寸暇を惜しんで学習する姿が見られるようになってきた。 ・進路決定後も、さらに学力を高めようと努力する生徒がいる一方で、意識の向上が感じられない生徒が一部に見られた。 ・スタディサプリ活用は、生徒一人当たり1週間平均46分（動画1・2本分）であり、個別の課題（弱点）に対して有効に活用できた。	B	・進路決定者を自主研修期間中の課外や学習会において、最後まで粘り強く取り組ませるための指導や取組の工夫が必要である。 ・推薦選考にあたっては、今後も学習への意欲や適性を十分に見極めて行っていく。
	③シラバスの進捗状況を確認し、新入試に対応した学力の定着を図る	【学習企画】 ・学習企画委員会で、不定期にシラバスの進捗状況を確認しており、おおむね達成されている。（臨時休業による遅れは除外する） ・授業や定期考査の問題など、新入試を意識した工夫がなされ始めている。	・シラバスに準じた進捗状況が定期的に確認されている。 ・自分の考えた道筋を的確に表現できる記述力が身についている。 ・英語のスピーキングに対応した授業がなされている。 ・新学習指導要領実施に向けて、新たな教育課程の編成ができている。 ☆S1：1月進研模試3教科の平均点全国偏差値48以上。 ☆S2：1月進研模試3教科の平均点全国偏差値48以上。 ☆S3：11月進研模試5教科全国偏差値48以上20名以上。 大学入学共通テストを利用した国公立大現役合格者 25名以上。	・必要に応じて、研修会を実施する。 ・シラバス進捗状況を定期的に確認する。 ・新入試対応の模試分析を行い、情報を共有する機会を設ける。 ・新しい教育課程の編成について、情報を収集し原案を年度内に完成させる。 ・校外模試の結果を定期的に確認・分析し、学力の定着状況を把握し、改善を図る。	・シラバス進捗状況については、学習企画委員会で定期的に確認を行い、遅れなく実施できた。 ・新入試対応の情報提供を随時行っているが、独自に研修会を実施することはできなかった。 ・新教育課程については、ワーキンググループで議論し、原案がをほぼ完成させた。 ・1月進研結果 S1：　SS46．6　数学・国語は目標に近い数字であったが、英語が弱かった。 S2：　SS46．6　英語は上昇傾向で目標に近づいているが、国語が低かった。 ・S3　11月模試結果はSS48以上　15名で目標値に届かなかった。 ・S3　国公立大学合格者は34名。うち、共通テスト利用合格者は25名。	B	・シラバスの進捗状況については、継続して進度を確認し学力の保障に努める。 ・新教育課程の編成については、今後の大学入試科目の公表に備え、柔軟に対応する。 ・受験対策として、本年度の共通テスト問題をもとに、入試対応の演習を行う。また、情報収集に努め、必要される学力（思考力・表現力などの活用する力）を学ぶ研修会への参加を促す。 ・模試分析においては、入試制度が変わることを意識しながら、各ステージともに強化すべき分野等の改善を図ることができるよう実施する。
情報収集、情報発信の充実	学校の魅力、生徒の活動状況を計画的に情報発信する	【総務】 ＜ホームページの運用＞ ・更新件数は大幅に増加している。 （更新件数：平成29年度194件→平成30年度675件→令和元年度956件） ・アクセス数は大幅に増加している。 （平成29年度約297,400件→平成30年度約233,213件→令和元年度427,136件） ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・時期をずらして内容を考慮し、年4回ずつ刊行している。 ＜ミッタシステムの運用＞ ・保護者の登録率は96%。 （登録切れの保護者への再登録、未登録の保護者への呼びかけを年3回行った。）	＜ホームページの運用＞ ・生徒の活動や必要な情報が適宜、掲載されている。 ・担当した行事、部活動の様子を教職員が速やかに掲載している。 ・学校の情報がわかりやすく伝わるようにする。 ☆ホームページ更新：平日毎日更新する。 ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・保護者に学校並びにPTAの活動や方針等を適宜、伝える。 ・発刊時期を考慮し、保護者が学校の様子を理解している。 ☆季刊倉西4回、倉吉西高通信4回刊行。 ＜ミッタシステムの運用＞ ・全保護者が登録し、漏れなく緊急連絡を行うことができる。 ☆保護者の登録：100%。	＜ホームページの運用＞ ・内容を考慮し、保護者等が求める情報を載せるようにする。 ・緊急の連絡など、速やかに情報発信する。 ・各分掌、ステージ、部活動など、担当した学校行事、部活動の様子を速やかに掲載できるように、適宜、担当教職員への掲示の呼びかけを行う。 ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・季刊倉西では学校から保護者宛のメッセージを、倉吉西高通信ではPTA活動を中心とした内容とし、年間計画を立て保護者にわかりやすい紙面とする。 ・季刊倉西を見やすい印刷にし、確実に保護者に届くようにする。 ＜ミッタシステムの運用＞ ・未登録の保護者への登録呼びかけを行う（4月・7月・12月の3回）。	〈ホームページの運用〉 ・更新件数 288件（1/31現在：昨年同期820件） ・更新件数は昨年度に比べて減っているが、平日毎日更新という数的目標には達している。 ・アクセス数 328,016件（1/31現在：昨年同期423,019件） 〈季刊倉西・倉吉西高通信の刊行〉 ・季刊倉西 ： 春号（4月）・部活紹介号（9月）・初秋号（9月）発行、春風号（3月）発行。 ・新型コロナウイルス感染症の影響で、行事変更等があり掲載内容に苦慮した。 ・西高通信 ： 182号・183・184号・185号発行 〈ミッタシステムの運用〉 ・登録切れの保護者への再登録、未登録の保護者への登録呼びかけを4月・7月・12月の3回行った。 ・未登録の保護者へは個別に連絡し、登録率100%に達したが、9月にシステム障害で受信できない機種が発生し呼びかけをした。12月の保護者懇談でも呼びかけをした。	B A A	〈ホームページ〉 ・教職員への掲載呼びかけを引き続きを行う（部活動、ステージ、グループなど担当者への掲載呼びかけを行う）。 〈季刊倉西・倉吉西高通信〉 ・季刊倉西：掲載内容、掲載時期を検討する。 ・西高通信：引き続きPTA広報部会で内容・構成を検討する。 ・季刊倉西と倉西通信、学校新聞と掲載内容が重ならないように内容を検討する。 〈ミッタシステムの運用〉 ・今後も保護者への登録呼びかけを年3回行い、その都度、未登録並びに配信不能になっている保護者へ呼びかけをする。
		＜中学生体験入学・中学校での高校説明会＞ ・体験入学では、2日間で348名（平成30年度284名）が参加し、99%が「参考になった」と回答。 ・各中学校で3年生への説明会を実施した。（6月）	＜中学生体験入学・中学校での説明会＞ ・中学生や保護者が倉吉西高の情報を持っている。 ☆中学生体験入学の参加者アンケートの満足度：90%以上。	＜中学生体験入学・中学校での説明会＞ ・チャレンジグループ活動の発表や案内など、生徒の活動によって倉吉西高の魅力が伝わるようにする。 ・施設、部活動見学の方法を考慮し、学校の様子がよくわかるようにする。 ・体験入学は保護者にも参加を呼びかける。	〈中学生体験入学・中学校での説明会〉 ・体験入学：参加希望生徒303名（昨年度348名）、保護者41名（昨年度16名）の申込状況であったが、直前に中止となった。 ・体験入学で予定していた内容を収録したDVDを参加予定中学校へ配布し、各中学校から好評を得た。 ・日本海ケーブルネットワークでも学校紹介を制作・放送していただいた。 ・説明会：各中学校で3年生への説明会（6月）は中止となったが、説明内容を収録したDVDを予定校に配付した。	A	〈体験入学・説明会〉 ・次年度も同様に開催する。 ・施設、部活見学において、グループの人数を少なくして説明がよく聞けるようにし、多くの部活を見ることができるように工夫したい。 ・各部の部活動計画の中に体験入学の時間帯を入れる。

A：9割達成、B：8割達成、C：6割達成、D：4割達成、E：4割未満